【298】

氏　名（本籍）	松本建速（まつもとたけはや）（岩手県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2044　号
学位授与年月日	平成16年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	**物質文化から見た古代の蝦夷**

主　査	筑波大学教授	文学博士	川西宏幸
副　査	筑波大学助教授	博士（日本史学）	前田　潮
副　査	筑波大学助教授		浪川健治
副　査	筑波大学教授	理学博士	梶原良道

論文の内容の要旨

本論文は，東北北部ならびに北海道南部の5世紀末～11世紀を対象とし，この地に集落を営んだ「蝦夷」と呼ばれていた人々が，在来民か移住者のいずれであったのかという問題を物質資料によって解明しようとしたものである。序章，第1部，第2部，結論から構成されている。

「序章」では，この地に集落生活を営んだ人々が，在来の東北北部の民なのか，新たな土器製作技術や集落形態をもたらした多数の移住者がいたのか，本論文の基調である歴史学上の問題をまず提起している。そしてこの問題の対象となる地理的な領域を文献資料の援用によって限定し，馬匹，集落，鉄，土器を選んで問題解決の手がかりにしている。さらに，これらの物質資料が存在する環境の復原と，人の移動を示す土器胎土の分析を加味した戦略を提示している。

第1部「物質文化から見た蝦夷社会の成立」は，馬匹，集落，鉄生産の3章により構成し，当該地域においてこれらの物質文化生産に関わる外来的技術の到来の系譜を解明している。それらは以下の3章に見るとおりである。

第1章「蝦夷と馬」では7・8世紀の末期古墳を資料として，馬の遺存体例や馬具をとり上げながら馬飼育の形跡を辿り，これが東北北部の東側に偏ることを示した。そして，この地域が環境的に農耕生産に適しないが，馬飼育にはふさわしいことを指摘し，馬飼育を行う移住者の存在を説いた。

第2章「蝦夷の集落」においてはその分布が飼馬地域と対応すること，使用する土師器が東北中・南部に由来するものであること，末期古墳もまた古代日本国の墓制に連なることを指摘して東北北部東側の先進性を説いている。これに対して東北北部西側では，東側より遅れて9世紀に集落が急激に増加したとし，東側の雑穀主体と異なり米作が中心であったことを説いて生業の相異性を指摘している。

第3章「蝦夷と鉄生産」においては東北北部西側で9世紀後半から11世紀にかけて鉄生産址が数多く発見されている点に注目し，この地域における鉄生産の高揚を原料の砂鉄よりも燃料の木材に恵まれていた点を重視すべきであることを説くとともに，製鉄炉の技術的系譜が北陸や出羽方面に求められるとし，これらの方面からの工人の移住を示唆している。これとともに鍛冶については分布が東北北部全域にとどまらず北

海道南部にも及んでいることを示し，広範な分布域の形成要因として鍛冶のワタリ工人の活動が活発であったと説いている。

第2部では「物質資料からみた蝦夷社会における人の動き」と題して物質文化から読み取れる蝦夷社会内部における人の交流の動向に焦点を合わせて以下の5章にわたって論を進めている。

第4章「土器から人の動きを考える方法：土器胎土分析の応用」では著者自身が新機軸を開発した理化学的分析法の原理の提示とその有効性を説き，考古学的方法との併用によって出土土器資料の分析を進める方法論を提示している。

第5章「土師器と蝦夷社会」においては8世紀までの土師器をとり上げて東北北部及び北海道の道央部の土師器が野焼きによる焼成であることを示し，在地的なこれらの生産が9世紀に入って終焉を迎えたと述べている。

第6章「ロクロ土師器と蝦夷社会」ではまず，9世紀に入って出現した新技術をともなうロクロ土師器をとり上げて分布状況，生産遺跡の状況，胎土分析などの観点から分析を行ない，ロクロ土師器の生産は秋田市や青森県西部五所川原などのほか青森県中部，東部に地域的に集中し，その中で東北北部西側の生産品が北海道北部へ運ばれたと推定している。さらに，先行した土師器技法が北海道へ伝播して根付いたのと対照的にロクロ土師器製作者は特別の技術を保持する集団であるとし，移動性の高い専門工人の性格が強いことを指摘している。

第7章「擦文土器と蝦夷社会」は北海道を中心に発達する擦文土器を対象とし検討を加え，ロクロ土師器さらには須恵器の製作は専門工人であったのと異なり，土師器の影響下に成立した擦文土器の製作者が集落社会の女性であったと説いている。そして，10世紀中葉～11世紀においてこの擦文土器が津軽海峡を越えて東北北部，とりわけその西側に分布圏を広げるが，その胎土がこの地域の粘土を原料としていることから土器の伝播を技術保持者の婚姻による移住によるものであると推定している。

第8章「須恵器と蝦夷社会」においてはその生産遺跡である窯跡の分布が9世紀後葉～10世紀中葉の東北北部西側に集中し，北海道にもやや遅れて10世紀中葉～11世紀にかけて広がっている点を指摘するとともに，これをこの地域が陶土と燃料材に恵まれていた点に求めた。また，須恵器生産が高い生産技術を必要とする点から集団の出自が東北地方以南にあったことを説き，その移住目的を当該時期における津軽平野に居を定めた農耕生産者の生活上の需要に起因するものとしている。

「結論」においては5世紀末～11世紀にわたり，蝦夷社会における集団の移住の実態を物質文化の面から次の3つの波にまとめている。

第1の波として5世紀末～6世紀初頭に少数ながら移住の形跡が認められ，それらは古墳時代社会の系譜に由来する文化の保持者によるものであるが，その意図は明らかでないこと，第2の波は，7～8世紀にかけてであり，東北以南の馬飼いを生業とする集団によるもので，水稲耕作より雑穀栽培に適した自然を有する東北北部東側の地域が選択されていること，第3の波は9～11世紀にわたるもので，水稲耕作に適した東北北部西側へ移住が中心となり，土地の開拓が進んだ時期ととらえている。

このように古代東北北部の蝦夷と呼ばれた人々は続縄文以来の在来民もいたが，多くは東北中部以南の古代中央政権の配下にあった地域からの移住者から成っていたと見ている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

文献に記録される古代東北地方北部～北海道における「蝦夷」に関してその集団としての実態に論及した例は数多くあるが，それらの多くが安易な人種論的認識に立脚したり，あるいは帰結する傾きをもってきた。これに対して本論文は律令国家政権の確立を目指した古代日本国家がその正統性を周知させる上で作り出し

た概念的な境域民であるという冷静な立場に立ち戻って歴史的存在としての「蝦夷」の本来の位置づけを目指している。そして蝦夷の実体は東北中部以南の地域から移住した古墳時代社会の荷い手集団が主要部分を成したとする見通しに立って，これを考古学的資料の分析に基づいた実証性の高い内容にまとめ上げている。すなわち，対象とした5世紀末～11世紀の間の馬飼育，集落，住居，土器，鉄生産などの各要素を独自の観点から分析し，三つの画期に整理することに成功している。また，これらの生活文化要素と当該地方の自然環境との密接な関わりに着目し出土資料のもつ物質的特徴を考古学的観察とともに理化学的分析作業を行ない，各要素に内包される文化，自然の両面にわたる特徴の関わり合いを捉えた複眼的分析は独自性の高い方法といえる。なかでも土器の胎土分析作業や鉄生産に関する復元的分析を自らの手によって意欲的に行ない，その成果は学界に対して新知見をもたらしている点は高く評価すべきであろう。

他方，人間集団の移動を推考する上で移住過程や在地集団との交渉関係に関しての分析に不十分な点が認められることは否めない。とくに，擦文文化成立以前の段階において北海道系の集団が在地集団としてどの程度関与していたのかを明確にしておくことは重要な問題であろう。ただし，このような問題は今後の研究により解決し得る可能性の範囲に納まるものであり，本論文の主旨を大きく損なうものではない。

このように本論文は全体として多角的な分析に基づく実証性に裏打ちされた成果を提示しているとともに，随所に高い独自性を具えた方法を駆使し，学界に意義深い新知見をもたらす内容となっている。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。